

## 「第29回アドバイザー全国大会」11/13(日) オンライン開催 報告 テーマは「“つながりと共感”で地域共生社会を創る～今こそアドバイザーが担い手に！」

令和4年度「第29回健康生きがいづくりアドバイザー全国大会」が11月13日(日)にオンライン開催され、個人参加に加え協議会単位でまた各会場に複数のADが集まった集団参加等、全国から150名を超えるアドバイザー(以下、AD)に視聴いただきました。

辻理事長からは「人生100年時代のアドバイザーのあり方について」と題した「講話」が、続く「2、アドバイザーの魅力度アップを目指して」では、5協議会から『AD養成講座での参加者増を目指した取り組み』『AD会員のフォロー体制及び活動支援策』について、地域性に富んださまざまな工夫や試行の事例発表がおこなわれ、AD受講者増へのヒントが見えたプログラムとなりました。続いて「3、『人生100年時代の健康・生きがい新研究会』からの中間報告」では、『女性の社会参加』『多世代交流』『スマートフレイル』『ネットによる“つながり”』といった、人生100年時代及びウイズコロナに対応した新研究会発足の経緯と中間報告があり、今後の研究成果に期待が持てる内容となりました。最後に「80歳からの生き方研究会」の研究成果をまとめた一般販売書籍「80代からのいきいきライフ」(四六判、264P、1600円+税)の完成披露が行われ、早速多くのADから購入申し込みをいただいているところです。(書籍の紹介はP10)

時間	プログラム (進行:大和 哲(財団事務局))
12:00～	入場開始 申込者へは11月4日(金)にオンライン参加の招待メール送付、入場は当日12時から
13:00～13:15	開会挨拶(財団概況含む)——— 松浦隆志(財団常務理事)
13:15～13:45 (30分)	1. 講話「人生100年時代のアドバイザーのあり方について」 辻 哲夫(財団理事長、東京大学高齢社会総合研究機構客員研究員)
13:45～14:45 (60分)	2. 「アドバイザーの魅力度アップを目指して」——— 進行:藤村宣之(財団事務局長) ＜協議会からの報告と意見交換＞ (1)「アドバイザー養成講座」参加者増を目指して「参加者募集の工夫」 ①(一社)神奈川健康生きがいづくりアドバイザー協議会——— 事務局長 徳田裕美子 ②石川健康生きがいづくりアドバイザー協議会——— 会長 岸 弘市 ③山梨県健康生きがいづくりアドバイザー協議会——— 会長 沢登京子 (2)アドバイザー育成策としての「受講後のフォロー体制、活動支援策」 ①(一社)健康生きがいづくりおかやま——— 会長 松井浩明 ②(一社)健康生きがいづくりアドバイザー北海道協議会——— 代表理事 渡邊一栄
14:45～15:00	休憩
15:00～16:00 (60分)	3. 人生100年時代の健康・生きがい新研究会からの中間報告 ——— 進行/小川文男(「新研究会」主任研究員) (1)「新研究会」の目的と今後の方向性(小川文男) (2)部会からの中間報告 ①「女性の社会参加」部会——— 江口郁子(長岡健生創生ネットワーク) ②「多世代交流」部会——— 八木一龍(神奈川健生) ③「スマートフレイル」部会——— 井手口ヤヨイ(ひろしま健生) ④「ネットによる“つながり”」部会——— 坂手誠治(健生ネットワーク京都) (3)「80歳からの生き方研究会」成果物完成報告(吉田隆幸(財団副理事長)) ○一般販売書籍「80代からのいきいきライフ」完成披露と、「人生100年時代・ライフスタイル充実講座～80歳から輝いて生きる自分をつくる～」の全国展開へ向けて
16:00～16:25	4. 全体講評——— 國松善次(財団副理事長)
16:25～16:45	閉会挨拶——— 吉田隆幸

# 1. 「開会挨拶（財団概況含む）」 松浦 隆志（財団常務理事）

## (1) 健生財団の概要

2022年3月末時点のAD会員の状況は、登録者数が601名で、平均年齢は69.2歳。全国の協議会数は36で、そのうち法人格を有する協議会12となっています。登録者601名の構成は、男性は65歳以上が約8割を占めるのに対して、女性は約6割で、平均年齢は男性が71.6歳、女性は66.6歳となっています。全体としては65歳～75歳がピークですが、80歳以上の方も約100名おり、現在も各地でAD活動を元気に続けられている方が多くおられます。



## (2) 主な前半の事業・活動概況

「AD養成事業」については、今期新たに「AD活動支援オンライン講座」として「フォローアップ講座（7、9月）」「スキルアップ講座（6、8月）」を導入。また、「財団事業案内」改訂版の発行、ホームページに「ライブラリー」の開設等を行っています。

「フレイル予防」については、東京大学高齢社会総合研究機構（IOG）の「フレイルチェック」を導入している市町村が24都道府県で93市町村。年内に100近くになると思われ、フレイル予防に対する国民の意識が徐々に高まってきた中、IOGでは、財団も賛助会員として参加するフレイル予防普及・啓発を目的とした「NPO法人 全国フレイルサポーター連絡連合会」を立ち上げたところです。

「100歳大学」の普及状況ですが、コロナ禍で2年間中断していた滋賀県栗東市、甲賀市が今年から講座を再開。和歌山市、長岡市では本格実施へ向けたプレ100歳大学が実施され、その他三重県、神奈川県、千葉県、北海道の各地でも導入へ向けた取り組みが始まっています。

## (3) 大会テーマ「“つながりと共感”で地域共生社会を創る～今こそADが担い手に～」について

ここ数年で考えてみると、少子高齢化問題の解決の要は「高齢者の活躍」がどこまで進むかということによって考えています。「高齢者が次世代を支える役割意識を持つ」というパラダイムシフトといえますか、これまでの現役世代が高齢者を支えるということから、高齢者が若い世代を支える、への意識の転換が必要になります。私たちの知識・経験を活かして多世代の意思・知識・経験・活動などへの支援が重要な役割です。既に地域のリーダーとして活躍されているADの皆様方には、さらにステップアップしてSocial Innovator（社会的な改革者）としての活動領域の拡大をぜひ目指していただきたいと思います。

この30年、「健康生きがいがづくり」のパイオニアとして、また地域共生社会の実現を担うトップランナーとして活躍されてきたADの皆様とともに、財団の2つの軸である「フレイル予防」、そして「100歳大学」普及を推進していきたいと思っています。

この図は飯島先生が国の有識者会議の中で提唱されている、「国家戦略としての3つの『守る』」で、「感染」「経済」、そして我々の活動に関わりのある「健康・健全な地域社会」で、フレイル予防を軸としたまちづくりを再構築するということが唱えられております。我々としてもまさにここを目指して活動していきたいと思っています。

**第29回AD全国大会テーマ**  
【“つながりと共感”で地域共生社会を創る～今こそADが担い手に～】

**(1) 高齢者の活躍が少子高齢化対策の要**

- ・次世代を支える役割意識（パラダイムシフト）
- ・多世代の意思・知識・経験の統合マネジメント
- ・地域社会のSocial Innovatorとしての活動

**(2) 健康生きがいがづくりADへの期待**

- ・健康生きがいがづくりのパイオニア（先駆者）
- ・地域共生社会の実現を担うトップランナー
- ・フレイル予防&100歳大学普及活動推進役

**(3) 健生財団のAD・協議会支援強化方針案**

- ・AD支援（スキルアップ、ICTリテラシー、研究会成果の利活用、講師養成など）
- ・ネットワーク構築（財団+協議会・AD会員+フリーAD）と情報共有化・相互連携推進
- ・AD養成事業の改善（現行システム、募集方法、会員維持策などの総合的検討）

Withコロナ社会における個人/地域のNew Normalの再構築  
—国家戦略としての3つの「守る」—

感染 — 経済

3つの「守る」

健康・健全な地域社会  
＜フレイル予防を軸としたまちづくりの再構築＞  
生活不安定、貧困の懸念、  
人々のつながりや地域の絆の弱体化

図5 国家戦略としての3つの「守る」  
①感染、②経済、③健康/健全な地域社会

出典：フレイル予防・対策：基礎研究から臨床、そして地域へ、公益社団法人 長寿科学振興財団 2021.3発行

## 2. 講話「人生100年時代のアドバイザーのあり方について」

辻 哲夫（財団理事長、東京大学高齢社会総合研究機構客員研究員）



### (1) 人生100年時代とは

人生100年時代のアドバイザーのあり方を考えるに当たり、まず「人生100年」というキーワードを理解する必要がある。人口ピラミッドの土台が高齢者になってきているということ。つまり地域に多く住んでいるのは高齢者という社会になるということ、これは一言でいえば未知の世界に向かっているということです。100歳を目指している人がものすごく増える中で、フレイルを如何に遅らせるかが最大のテーマ・課題となってきた。しかし、フレイル予防が重要であると同時に、最後は弱るということは避けられない、ということです。弱った時期を短くしたいが、この期間をどう幸せに生きるか？ということが重要な問題となってきた。これが今後、我々が「健康生きがい」というものを考える時の大きな大前提です。

### (2) 人生100年時代の生き方とは

人生100年となると、65歳以降35年間は誰にもあり得ることになります。100歳まで生きる生き方はどうなるのかということ、郊外団地の再生の事例を通してわかった。それは、高齢者がまず頑張るんだということ。次世代に引き継ぐんだということ。これが重要だということをお願いしたい。持続可能性のない「消滅自治体」の進行が日本全国でゆっくり進んでいます。それは大都市圏でも起こっていて、このことから消滅する自治体とそうでない自治体の格差が生まれてくることになる。

神奈川県横浜市にある「上郷ネオポリス」という高級住宅街では、自治会の高齢者が中心になって「街づくり委員会」を立ち上げ、みんなで街の在り方を議論し、地域の開発会社と協力してコンビニエンスストアを誘致。自治会がNPO法人を立ち上げ運営も行った。集会所をつくり、そこで町の催しを行うなど、まず、住民自身が立ち上がった。それでも元気な高齢者は弱っていく。そこで在宅介護サービスを誘致して、認知症が進行したらグループホーム等を置き、この地域から出ていかないような対策を講じた。さらに、空き家は改装して次の世代を呼び込んでこの街の持続可能性を確保しようという動きまで向かって行った。これは高齢者が立ち上がったことが始まりです。そして、若い人達に関心を持ち始めて、地価もこの周辺の地域と比べてここだけが下げ止まった。高齢者が立ち上がり次世代に繋いでいくという活動が必要だということを、そういう動きがはっきりしてきているということ、私は皆さんに訴えたいと思います。自分の住んでいる地域では高齢者がメインなんです。高齢者がどう動くかということが、まちを、将来を決めるんですよ。

### (3) ではどう生きるか

それではどう生きるかということですが、出来る限り元気であるために、「年を取っても頑張らないかん」ということです。そうするとフレイル予防が非常に重要になる。年を取っても自分たちが頑張れば、元気でいられる期間を長くできる。「自分たちの未来は自分たちでつくれる」というのがフレイルの考え方です。

高知県仁淀川町では、住民がフレイルやプレフレイルの早期の段階では、うまくすれば戻れる、あるいは遅らせることが可能、ということに目覚めて、フレイルチェックのサポーターが中心となり、地域住民に訴えて「これはわれわれ自身でこの町を明るくしようじゃないか」と言い始めた。しかし頑張ろうといっても、年をとったらそう簡単ではないので、励まし合うということが大事になってくる。特に年をとったら助け合うことで頑張れる。一方で応援する側も、ものすごく充実感があるので、これを町の中にどうつくっていくかが重要となる。要するに「自助と互助」は一对であり、基本的な「つながりと共感」があって社会は動いている。そこで、「自分たちが元気うちに、この町の小さな役場周辺の拠点にサ高住等をつくり、そこで地域（自宅）から施設に移らないように頑張る、そこで自分たちの家をなんとか若い人がその後を継いで入ってきてくれないか？」という町づくりにつながる議論を始めた。こうしてフレイル予防を考える課程でビジョンが膨らんでいった、という実績が仁淀川町で示されています。

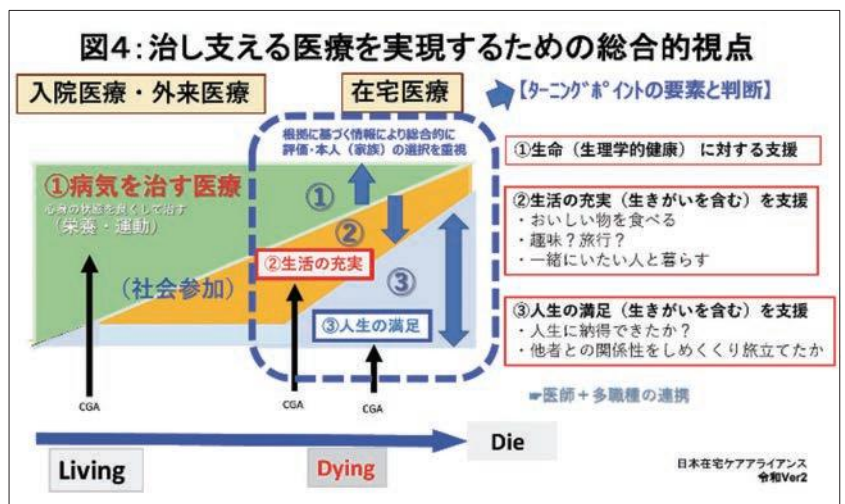
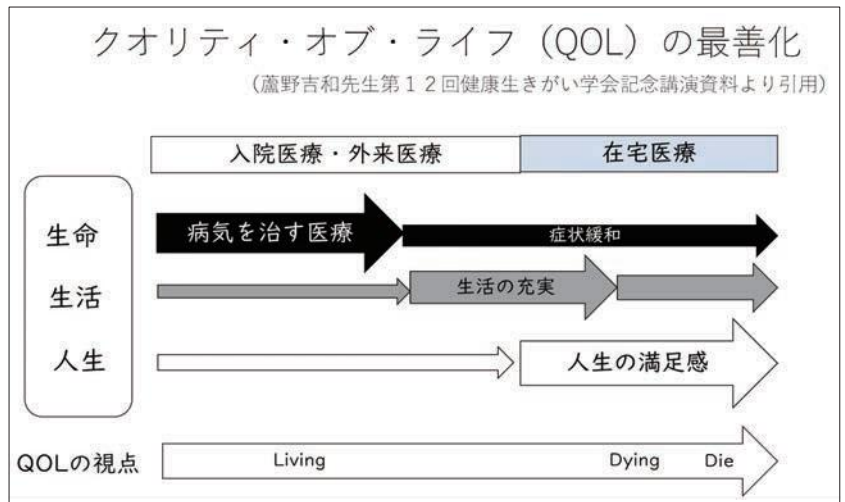
「第12回健康生きがい学会」（令和4年11月12日）の記念講演「高齢期の健康生きがいについて～在宅医療の実践の視点から～」で、蘆野吉和先生（日本ホスピス・在宅ケア研究会理事長）が示されたQOL（クオリティ・オブ・

ライフ)の「ライフ」は「生命・生活・人生」と訳されます。命を守るのは、一番が病気を治すこと。しかし慢性期の病気は痛みをなくす、楽にすることしか医師がやることはなくなります。だんだん弱ってきた時に大事なのは、QOLというのは暮らしの充実、人生の満足であり、言葉をかえれば「生きがい」があるかどうかということにつながります。我々健康生きがいづくりアドバイザーとしては、弱ってからも「健康生きがい」が重要である、ということということを今後考えていく必要があると問題提起されました。

ここには、「Living、Dying、Die」と書いてありますが、「Die」というのは死ですね。死に向けて実はやることはなくなっていくけれども、生活の充実。さらに満足できる人生だったか？生きがいはとても重要なことであり、不健康な状態であっても生きがいはあるということです。

死を目前にして、本当に生きがいが奪われる状態にある人への支援に対しても、本人は喜ぶのですが、その本人が喜ぶ姿を見た家族はもちろん、関わった人々が本当に嬉しく思えること。最後まで大事にしなくてはならないのは、「その人がその人らしく生きるということを支援するということ。そしてその人がその人らしく生きた時、そこに関わった人々は満たされる」ということを意味している。

生きがいの問題というのは死ぬまであるし、そこに関わるといことはとても大事だと。つまり、「生きがいというのは、つながりと共感が生み出す世界」ではないかと思えます。



#### (4) 健康生きがいづくりアドバイザー活動の在り方について

これから未知の時代です。こうした時期にこそ健康生きがいを学びあい追求し続ける精神をアドバイザーは共有したいと思えます。特に今申し上げた生きがいということの意味を追求することと、今後、地域の担い手として、我々アドバイザーは高齢者のモデルになる、次の世代に背中を見せるということ。まずは仲間を増やす。そのためには自分の住む地域に愛着を持つということが最も大切だと思います。そして、アドバイザー自身が連帯を深める必要がある。皆が手を繋いで前進する。運動論としては多世代とつながり、未来へ向けて地域の持続性を考えることが必要となる。

#### (5) 健康・生きがい開発財団の当面の基本目標について

財団の当面の基本目標は、アドバイザーの養成と研修の強化。そして、地域の協議会の機能強化と全国の連帯です。各論としては、フレイル予防が重要で、全国で大きな柱にしようという運動(編集部注:(一財)医療経済研究・社会保障福祉協会が12月1日に発表した「フレイル予防のポピュレーションアプローチに関する声明と提言」= P 9に紹介)が始まります。また、財団の「人生100年時代の健康・生きがい新研究会」(P 7に紹介)での、特に若い「女性」と「次世代」等に視野を向けた研究会活動が重要と考えています。

### 3. 「アドバイザーの魅力度アップを目指して」

アドバイザー（AD）養成講座の参加者増を目指した取り組み、登録後のフォロー体制や活動支援策等について、5協議会からさまざまな工夫や試行の事例発表がおこなわれました。

#### (1) 人生100年時代とは

##### ① (一社) 神奈川健康生きがいくリアドバイザー協議会……事務局長 徳田裕美子

AD受講者増を目指し実施していることは、まずは、参加者募集チラシの県内全域への配布、ホームページからの受講申込み受付、「定年時代」という無料のフリーペーパーの活用等で、その他、登録AD活躍の場創出が神奈川健生の魅力づくりにつながると信じ各種サークル活動等を行っている。なお、「産業カウンセラー」資格を有するADが多いことから、日本産業カウンセラー協会へのアプローチや、産業能率大学通信講座受講生の協議会登録へ向けた支援（通信講座の受講中にAD活動が理解できる動画の紹介）等、財団との連携・協力をよりすすめていきたい。



##### ② 石川健康生きがいくリアドバイザー協議会……会長 岸弘市

活動方針として、明るく仲良く楽しい仲間づくりを目標に、ADがリーダーとなり各種サークル活動を展開中。さらに登録ADが得意分野の講師を担当することで、謝金を得られる機会を創出するため、いしかわ長寿大学、公民館講座等への出前講座（講師活動の場）の開拓に力を入れるとともに、講師活動に必要な「プレゼンテーション能力研修会」等を実施している。なお、AD養成講座開催に際しては、参加者の一般公募をせず登録ADのネットワークを活かし、信頼できる知人、友人を紹介するという形で実施している。



##### ③ 山梨県健康生きがいくリアドバイザー協議会……会長 沢登京子

山梨健生では2016年から「AD養成講座」を山梨県の中心で開催。開催に際しては、山梨日日新聞に10回程度広告を掲出している。また、毎年開催している「健康生きがい講演会」当日には、必ず新聞記者による取材と講演会の模様を記事として掲載いただいている。なお、協議会のネットワークを活かし医療、健康、福祉分野の行政・団体・組織から「後援」名義をいただき実施している。これからも、少しでも新しい情報を皆さまに届けられるように、日頃のサロン活動の充実を図っていきたい。



#### (2) アドバイザー育成策としての「受講後のフォロー体制、活動支援策」

##### ① (一社) 健康生きがいくおやかやま……会長 松井浩明

健生おやかやまでは、理念と思いが詰まった「はばたく健生おやかやま」という協議会の歌を、作詞：有村会員、作曲：檜山会員で制作。この歌により仲間意識が高まってきている。行政・学識経験者・企業・市民との連携と絆を深めるためのさまざまな活動を行っており、自助・互助の精神のもと健康寿命延伸へ向けた「フレイル予防事業」、生涯現役わくわく大学講座、フレイルチェックを取り入れた健生茶屋の運営等を通じ、住みやすい街づくりに貢献していきたい。



##### ② (一社) 健康生きがいくリアドバイザー北海道協議会……代表理事 渡邊一栄

北海道健生として通年で実施していることは、まず、毎月第4土曜日午後の定例会（ハイブリッド方式）開催である。そのためのオンライン会議参加のスキルアップを目指したZoom勉強会や認知症予防としての「共想法」

を実施している。2点目はADがリーダーとなつての各種サークル活動の展開。3点目は講師派遣活動で、札幌市社会福祉協議会主催のシニア向けセミナー「知っ得ひろば」(毎月第1火曜日に30分開催)の講座とその後の相談会を受託し、通年で担当している。



## 4. 「人生100年時代の健康・生きがい新研究会」からの中間報告

### (1) 「新研究会」の目的と今後の方向性(小川文男(「新研究会」主任研究員))

新研究会の目的は、1、ADの全国レベルでの情報交換及び活性化の促進 2、点(個人)の活動をネットを利用した線(情報共有)及び面(協議会)の活動へ 3、実践的な地域活動の課題解決及び新たな取り組み、並びに多世代に亘る多様な高齢期の健康・生きがいづくりの研究・提言の3点。全国のADに呼びかけ応募したメンバーにより6月20日発足。今回の中間報告を経て2月に研究成果をまとめ、3月「研究報告書」完成のスケジュールで、研究成果は「季刊 いきがい」に発表・掲載の予定です。

### (2) 部会からの中間報告

#### ① 「女性の社会参加」部会……江口郁子(長岡健生創生ネットワーク)

研究テーマとして、学び(1人称)、活動(2人称)、社会参加(3人称)に繋がる人材の育成、産業創生や新産業参画(プロダクトシニア、エンドユーザー他)、コミュニティビジネスやソーシャルビジネスへの発展、生涯現役としての活躍、生きがい就労・社会貢献他)が挙げられ、この中から当部会での方向性を探っている。

#### ② 「多世代交流」部会……八木一龍(神奈川健生)

多世代交流の実践を踏まえ、持続性、拡大性のために多くの会員の関わり必要性。多世代プログラムを取り入れるためには自治体等行政との連携・協働の必要性。多彩な地域の資源・多様なメンバー等の活用による多世代交流としてのつながりができるように努めることが肝要である等の課題があげられた。

#### ③ 「スマートフレイル」部会……井手口ヤヨイ(ひろしま健生)

フレイル予防の啓発と意識づけから、行動・継続へ結びつけるためには、さらなる啓発の推進、行政 医師会・歯科医師会といった各種団体・教育機関・企業・マスコミ・地域包括支援センター等との提携・連携をすすめ、イキイキ体操、百歳体操、地域サロン、高齢者大学、認知症サロン等を通じた広報・啓発が重要であり、目標として、AD 個々人の生き方がフレイル予防実践モデルとなることを目指している。

#### ④ 「ネットによる“つながり”」部会……坂手誠治(健生ネットワーク京都)

健康長寿の実現には、高齢者の孤立や孤独を防ぐ「人と人が関わり合う機会」「つながりの創造」が今後ますます課題となってくる(求められてきている)。こうした社会参加の機会の手段としてSNS(ソーシャルネットワークサービス)利用の可能性、問題点などを明らかにし、SNSを利活用した社会参加の方法を提案することを目的として、各種文献、統計、先行事例の収集と検討をすすめる。なお、介護予防型デイサービスにおけるWeb会議ツールを用いた交流の実態調査も実施する予定である。

### (2) 部会からの中間報告

「80歳からの生き方研究会」が1年半の研究結果をまとめた一般販売書籍、「80代からのいきいきライフ」がこの12月1日に完成します。出来るだけ多くの方にご覧頂きたい。と同時に同書籍を教材にした「人生100年時代 ライフスタイル充実講座」を全国で開催していく予定です。まず初めに11月9日に京都健生を通じ「京都SKYシニア大学」で実施しました。アンケート結果からは、改めてですが、ADのみに限らず一般の高齢者にも役立つことがわかりました。来年1～3月に神奈川健生と連携し5回の講座を実施する予定で、埼玉、徳島でも検討がすすんでおり、今後全国各地で各協議会との連携・協働により共同開催方式で実施していく予定です。どうぞよろしくお願い致します。(※ P10～11に関連記事あり)

## 5. 「全体講評」

### 國松 善次（財団副理事長）



「つながりと共感で地域共生社会を創る」という大きなテーマで開催された今大会。「健康生きがい」が時代と共に進化しているんだと理解した。前半では地域の課題（悩み）を如何に解決していくかが具体的に示され、示唆に富んだ事例発表で大いに刺激を受けた。いずれにしても、私たちがアドバイザーであることの幸せを感じた。それは、アドバイザーになることによって、「老い」について考える機会を得られたということである。地域活動を通じ自らがモデルとなり示していく。早いか遅いかは別にして、誰もが老いをそして死を迎えるが、どのような状況になろうとも幸せ感を得られるということ。このことを理解して他者や社会に発信（アドバイス）していくことが大切であると感じた。

後半では、「人生100年時代の健康・生きがい新研究会」が取り組むテーマについての中間発表があったが、中でも「女性の社会参加」については、世界に比べて遅れている女性の社会参加を、地域社会ではどのようにすすめたら良いのか。また、「多世代交流」についても、益々重要なテーマとなっており、研究成果の発表を大いに期待している。

この間、コロナフレイルの問題、中でも精神的なフレイルが大きな課題となってきたが、「多世代交流」はその解決の糸口の一つになるのではないかと期待している。また、「ネットによる“つながり”」についても、手段としてICTリテラシーの向上は必須であり、SNSやネットは使わない手はない。仲間内だけに留まらず、地域の方々をサポートする手段としても必要である。いずれにしても、全国のアドバイザーがメンバーとして参画しているこの新研究会は、とても有意義な活動であると理解した。

そして、今日のテーマ「共感」とは響き合うこと。これを「継続」していくことが大切である。まずはアドバイザー自身が、そして協議会が実践していかなくてはならない。

この度の新刊「80代からのいきいきライフ」を読み、まさに「これだ！これだ！」と感じた。言葉を通じ、また書籍を通じ、さまざまな機会を通じて広報していくことが大切である。財団が提唱する理念の発信ツールが増えたことはとても喜ばしい。書籍を教材にした「勉強会」「講演会」「講座」等を通じて現状を打破し、反転攻勢に転じることを期待したい。

世界で誰も経験していない「超高齢社会」。いまだ課題が体系化されていない中で、我々がその課題解決へ向けた仕組みをつくり行動していくこと。「つながりと共感」という、心の響き合いの機会を提供できる仕組みづくりを、我々アドバイザーに求められているんだということを改めて感じた。チャレンジと継続、そして仲間づくり。この課題を、私自身も共有していきたい。お互いこれからも頑張っていきましょう。

## 6. 「閉会挨拶」

### 吉田 隆幸（財団副理事長）



最後まで熱心に参加いただき、ありがとうございました。財団及び協議会発展に向けた2つのプログラムが生まれ、アドバイザーの高齢化がすすむ中で、如何に組織を活性化させていくか、人生100年時代にマッチしたアドバイザー活動の方向性について議論いただいた今年の大会。協議会活性化には、いかに若手アドバイザーを増やし、先輩アドバイザーがどう盛り上げ共に活発に活動していくかが重要であると考えています。そして、若手アドバイザーの活躍には、60代・70代アドバイザーの活躍が重要であると考えている。

会員数増への対策は喫緊の課題で、このことなくしては全国の協議会の運営も厳しい状況にあり、これまでのボランティア活動のみでは運営もままならず、例えば、「ポールウォーキング大会」「成年後見事業」「各種教室・講座開催事業」等の収益事業の導入・構築が求められている。これらの事業を行政との連携・協働で実施する（行政から受託する）事例も見られ、地域住民の方々にとって魅力ある事業を、何とか創り上げ、そして共有していきたいと思っています。今日の発表の中に、多くのヒントと示唆があったのではないかと思います。長時間にわたるご視聴、ありがとうございました。